

主義を奉ずるので、吾等の日本主義的王張とは相容れないと謂ふ立場の相異を最も大なる點として考へてゐたので、之れは敢後に至る迄幹部の苦心した面目問題となつたのであるにも不拘合同せんとするに至つたには傳へらるる組合財政上の困難（負債）もあり、且つは最近組合の活動發展に殆んど見るべきものなく従つて創立當初の意氣込も漸やく薄らいだことと含まれない状態である。而して日鐵後業員組合側より見れば、製鐵官民合同反對運動を機會に鐵廠、同志會兩組合の合同を完成しなから協進組合の出現に依つて再び同一工場内に組合對立の状態を繰り返すこととなつたので、其の組合戦線の強化策に不影影響あると共に、協進組合側より社會民主主義披ひされることが製鐵所後業員抱擁上待策でないことは組合の創立に當り政黨支持（社會大衆黨支持）を避けてゐる

ことに徴しても組合員一般の空氣が察せらるるのである。即ち後業員組合亦必ずしも日本主義的な行き方に反對でないことは兩組合の綱領を比較しても明かである。そこで兩組合は其の主義上根本的に相争ふ程度には組合員全般の考へが對立的でないのである。即ち何れにしても頗る穩健なのである。加ふるに製鐵所當局亦兩組合の合同に對して賛成なるが如く傳へられてゐるので、兩幹部の接近は勢ひ其の合同を容易なものにせざるを得ない。故に今回の合同は實質上自然的な行き方であらうと考へらるので、其の間無理な點は發見出來ないと思ふ。従て一部に傳へらるるか如く、社大黨選出縣議員藤井四郎氏の今秋の縣議戰對策なりとし、或は亦日鐵富士後業員組合結束以來叫ばれてゐる。

日鐵全工場を一丸とする横斷的單一労働組合（製鐵聯盟）の